

全国の棚田保全・中山間地域活性化のための情報紙

棚
田

ライステラス

第20号 2000.11.20
(季刊・年4回発行)

発行／全国棚田(千枚田)
連絡協議会
編集／ふるきやらネットワーク
〒169-0073 東京都新宿区百人町1-23-29-202
TEL 03-5389-9937 / FAX 03-5389-0078



佐賀県相知町葦野の棚田。棚田の向こうに唐津湾を望む。
(写真提供・相知町役場)

棚田、命の連鎖

作家 立松和平

山から湧いてきた冷たい水を、温めながら順々と下に落としていく。合理的なソーラーシステムだ。こうしてわが列島では、生きとし生ける命が無限に養われていくのである。その命の一端につながるのが、私たち人間なのだ。

冬の間休んでいた棚田に、水が入れられる。そのとたんに田んぼは生命のきらめきを見せる。稲の苗が植えられ、育っていき、緑はどんどん濃くなっていく。もちろん命も濃密になっていく。収穫の秋ほど美しい季節はない。この時のために、人は労苦をいとわず働いてきたのだ。

山の斜面につくられた棚田を見るたび、私は祖先たちの難儀を思い、涙ぐましいような感情にとらわれる。もともとは樹木に覆われた傾斜地にすぎなかったところを、木を伐り、水が水平に保たれるように棚を刻み、その棚にまんべんなく水がゆき渡るように水路を掘っていく。それが苦勞でないはずはない。一粒の米をとるために、時には何代にもわたったことであろう。

棚田は一朝一夕にできたものではない。こんなに美しい風景があることが、私たちには誇りである。

森からはじまる命の連鎖を、棚田は私たちのところまでつないでいる。もし棚田が壊れることがあったなら、多くの命が絶ち切られてしまうのである。

首長等会議では、直接支払制度の話題が

初日13日、全国棚田（千枚田）連絡協議会理事會を無事終え、総会、さらに首長等会議が行われた。首長等会議においては、個人会員である広島県・河野寛美氏から直接支払制度の現状についての質問が出、それを受け島根県柿木村の三浦秀史村長が「規制が、現状にそぐわず、地元の自主性を尊重するために、今年度は見送っている。実情を踏まえた政策が必要である」と応え、それを皮切りに各方面からの意見交換が展開され、有意義な会議となった。



写真上：総会・首長等会議の様子から。議長は、全国棚田（千枚田）連絡協議会会長・下川勝三三重県紀和町長。
写真左：理事会においてあいさつする、第6回全国棚田サミット実行委員長である堀万治福岡県浮羽町長。



棚田の里めぐりで石積みの見事さに驚嘆！



星野村、広内の棚田。137段も続いている。



浮羽町、葛籠の棚田。9月20日すぎには彼岸花が満開に。

柳生 博さんの笑顔に魅せられて

初日、柳生博さん（俳優）の話
を聴こうと星野村総合保健福祉センターには多くの人が集まった。会場に入りきれず、別室のモニター会場も人で溢れた。山梨県八ヶ岳で森との共生を実践し米づくりを行い、TV番組「生きもの地球紀行」等で活躍する柳生さんの話にも引き込まれた。「棚田は祈り。命。命をつないでいくために先人たちがつくったもの」。そんな日本の風景を愛してきた柳生さんの熱い思いが会場いっぱい広がった講演になった。



（千枚田）サミット な棚田、大きな役割」

全国棚田サミットも第6回を迎えた。棚田サミット初の2町村による共同開催は、サミットの内容を多彩なものにし、地元の人々を大勢巻き込み、秋田から沖縄まで初日700人、2日目1200人が集い、棚田情報を広く全国に伝えることを可能にした。

その中で注目すべき点は、地元小学生の参加、ボランティアガイドなど地元住民の積極的な参加ではなかっただろうか。これが地元の人々の棚田への関心を高めたことに、サミット開催のもう一つの重要な意義を見ることができる。サミット全体を紹介しながらこうした側面をクローズアップしてみたい。

棚田の里めぐりは、星野村からスタート。日本の棚田百選に選ばれている「広内・上原の棚田」を見学し、さらに浮羽町へ移動し、同棚田百選認定の「葛籠の棚田」を見学した。いずれの棚田でも、天高く積まれた見事な石積みには人々は驚嘆を隠せず、先人たちは、そしていまもここを耕す人々の労苦を感じずにはいられないようであった。

バスの中では地元ボランティアガイドによる地域の説明もあり、棚田でもまたボランティアアガイドの案内と、多少の雨も気にならない、思い出に残る棚田の里めぐりとなった。



日本の棚田研究者(地理学)の第一人者である中島峰広氏(早稲田大学教授)は、自らの足で

全国の棚田保全活動を紹介した中島峰広氏

調査した全国の棚田保全の事例を分類し、「棚田に吹く風」棚田オーナー制度の展開」として紹介し、棚田保全の活動が地元の試行錯誤のなかから生まれるものであることを示唆した。

県が運営するボランティア組織(鳥取県など)、公社が行うオーナー制(大阪府)、観光資源として活用する石川県輪島市、棚田米を出荷する岡山県中央町、オーナー制では「農業体験・交流型」の福岡県浮羽町、「農業体験・飯米型」の新潟県松之山町、「作業参加・交流型」の奈良県明日香村、「就農・交流型」の京都府大江町、「保全支援型」の長野県東埴市などの事例が紹介された。



共感が込められた立松和平さんの農の話

2日目、作家、立松和平さんは、棚田や米づくりへの共感を自ら1993年に宮城県蔵王で体験した米づくりとそこでの農家の人との会話を中心にして、話を進めた。最後は冗談交りに「実は今日ばかりは、こんな大勢の人の前で話すとは思っていなかった。20人くらいか」と笑った。棚田を守ろうという人がこんなにいらっしやるんですね」とも。



コーディネーター：納富昌子さん(NRKB毎日放送キャスター)
パネリスト：中島峰広さん(早稲田大学教育学部教授・棚田実証調査・棚田支援市民ネットワーク代表)
横川 洋さん(九州大学農学部教授・浮羽町棚田オーナー代表)
樋口泰範さん(浮羽町石垣保存実行委員会委員・浮羽町代表)
山科藤夫さん(広内・上原地区棚田保存実行委員会会長・星野村代表)

パネルディスカッション「棚田新世紀」

パネリスト、コーディネーターそれぞれの個性が生きたパネルディスカッションとなった。テーマは「棚田新世紀」。具体的には、「棚田の耕作放棄の現状、日本の農業問題」等の検討からはじまり、そこから「棚田の環境保全機能などの棚田の意義」を確認。そして、「耕作の継続、保全の可能性」へと話題は展開していった。

地元の棚田保全への取り組み

第6回全国棚田 ルネサンス 「棚田新世紀—小さ

2000年9月13日(水)~14日(木)
福岡県浮羽町・星野村

2日間で約2000人の人々が
集い盛り上がった!!

を「周囲から守らなければならぬ状況をつくってもらいたから」と自然体で本音を話す山科藤夫さんからは、「定年退職者の受け入れや人の心を思いやる心を育てるためにも教育面からも考えてはどうか」という意見が出された。

樋口泰範さんは、浮羽町の子どもが、道の駅で訪れた人に「棚田のことをどう思うか」尋ね、「あれは税金の無駄遣いだよ」といわれて涙を流し帰ってきた話などをし、交流事業を進めて棚田への理解を広くもってもらうことの重要性も訴えた。

横川洋さんは、ディスカッションの内容を踏まえ、「農業政策と林業政策が切り離されるのではなく、林と農を一体的にとらえていく政策が必要」と今後の課題を投げかけた。

最後に、中島峰広さんの「棚田がつぶれてしまえば、日本の農業自体もおかしくなる。農村都市交流は、農村空間を都市住民と農民が共有し、対等な立場で汗を流すことが大切。そうしてこそ未来が開かれる」という話を受け、コーディネーターの納富昌子さんは「農村も都市も関係なく、私たちの大事な棚田であり、風景であり、お米である」としめくり、1時間30分に及んだ熱い議論は幕を閉じた。

地元を大いに巻き込んだ 第6回全国棚田サミットに拍手!!

今回の棚田サミットにおいて、いたるところで見られた地元の人々の動き。
地元が変わりつつあることに注目!



交流会会場にて。写真は浮羽町商工会婦人部のみなさん。

地元の 小学生たちが 参加

浮羽町からは葛籠の棚田がある姫治小学校の5年生が、星野村からは広内・上原の棚田がある椋谷小学校の5・6年生が、棚田学習の成果をステージ上で見事に発表した。

子どもたち、もちろん学校の先生たちも含め、サミット開催地ということで棚田への関心が高まり、学習が進んだことは言

うまでもない。そして全国の人たちの前で発表となれば、子どもたちにとっては大きな挑戦だ。家族の応援もあっただろう。2日目、ステージに立つ子どももの晴れ姿を見ようと、家族もサミット会場に足を運んでいたようだった。子どもたちを通して、棚田への関心が地域に広く浸透していった。



姫治小学校の「棚田ニュース」では、司会、ゲストコメンテーター、レポーターの役を子どもたちがそれぞれ担っていた。

姫治小学校は、棚田の環境保全の役割等をパソコンを駆使し、「棚田ニュース」としてニュース番組形式で発表した。椋谷小学校は、棚田を探検して歩いた様子や米づくりの様子を群読したほか、最後に地元の星野太鼓を披露した。子どもたちの巧みな発表に会場はわき、棚田新世紀の幕開けを予感させた。



椋谷小学校は、おそろいのはっぴで身を固め、声高らかに息をぴったりとあわせ、報告発表をした。

会場には さまざまな 工夫が

星野村、浮羽町の会場には、全国の棚田の紹介や棚田の役割等のパネルが数多く展示されていただけでなく、浮羽町民ホール（入口には、浮羽町石垣保存実行委員会にも入っている垣築（がきつき）職人の手によって、6種類の積み方の石垣が今回、新

たに生まれ、石積みの技術を紹介していた。さらには、浮羽町内の石垣を調査しまとめた『うきはの石垣』（浮羽町石垣保存実行委員会発行）や地元の棚田の写真集も会場内で販売され、人々の関心を集めていた。

どの会場でも大勢のスタッフが笑顔で迎えてくださり、地元の名水百選の水でいれたコーヒ―や特産のお茶のおいしいもてなしにも心なされた。ロビーには、会場の中がわかるようモニターも設置され、会場内もロビーも人で溢れかえるサミットであった。



浮羽町民ホール入り口に、6種類の積み方で新たに組まれた石垣。

交流会、ボランティアガイドへの地元参加

交流会では約500人が会場(浮羽町・御幸小学校体育館)に集まった。会場には浮羽町と星野村、両方の女性部等があちやんたちの手づくりの味がずらりと屋台風に並び、御幸小学校や地元の和太鼓演奏なども加わり、大いに盛り上がった。

さらに今回忘れてはならないのが、ボランティアガイドの活躍だ。棚田の里めぐりでの説明は、地元で公募された一般人やインターンシップ(大学の授業の一環で企業実習を行う)で浮羽町役場を訪れた久留米大学の学生たちがボランティアで担当した。各自、棚田や地域の説明をするために、棚田や地域のことを個人的にも調べ、ガイドに挑んだという。農家、行政に限らず、地元の人々を見事に巻き込み、棚田への関心を地元を広めた今回の棚田サミット。真の結果は、後々大きく現れてくるにちがいない。そんなボランティアスタッフたちの声を紹介したい。

インターンシップ(企業実習)で浮羽町役場を訪れ、ガイドを務めました。(レポートより抜粋) 森田 晃弘(久留米大学生)

僕が乗ったバスには輪島(石川県)から来ていた人がいた。輪島からわざわざ来ているのだからもっと盛り上げていかなくてはいけないなと思ったが、気持ちとは空回りだった。

棚田サミットに参加している人々たちと会うことができた。そしていろんな話を聞くことができた。ほかのボランティアガイドの方々とも出会うことができた。棚田のことを考えている人が日本中にいることがわかり、

放っておいたら棚田はなくなってしまう。もっと棚田を大切にしていかななくてはいけないものなんだなと思った。棚田のいいところもわかったが、棚田の大変さなどもわかった。そして少しは理解できたつもりでいる。講演会などの舞台袖にいて、話の内容によって学んだこともあった。

実習はこれからの社会にとっては何が必要なのかというのを考えさせられた。

抹茶ゼリーは5〜6回、試作してできた味です。 田中十代子(星野村婦人会代表)

交流会で、私たち婦人会と商工会女性部は、郷土料理をご用意させていただきました。里芋まんじゅう、山菜料理、山菜おこわ、抹茶ゼリー……。材料は各家からの持ち寄りです。ただ、新米も芋も彼岸花も2週間あとならちようどいい時期だったんですけれど。里芋は足りずに、八女市の方から入手しました。

みなさんに喜んでいただいたのが何より良かったですね。中には抹茶ゼリーを「商品化したらどうですか?」なんておっしゃってくださる方もいて、

今回の棚田サミットで出すお料理として、お茶の産地でもある星野村をアピールする一品をと思って、新たに抹茶ゼリーを考えたのですが、あの味になるまでに5〜6回試作しました。ゼラチンの具合、抹茶の量、温度など抹茶の味と色、香りがうまく出なくて。何度も試して、ようやくできた味です。

工夫を凝らした分、喜んでほしい、よかったです。どの料理もあつという間にみなさんが食べてくださり、楽しいひとときでした。

棚田のこと、村のこと勉強しました。家族も巻き込んで……。 村田 武子(星野村商工会女性部長)

商工会女性部として交流会の郷土料理も担当していましたが、個人的には新聞で見たボランティアガイドに申し込み、バスの中で星野村の説明をさせていたいただきました。星野村のガイドは25名でしたが、そのうち10人は八女市、黒木町など村外の方だったんです。

いい経験でした。すつこく良かった。一生の思い出です。終わってからガイドのみなさんと反省会を開きましたが、みんな勉強し苦労してがんばっていたものですから、来年も同窓会しよう、棚田を守っていかなくてはならないね、って盛り上がってました。

役場で勉強会があったり、資料をいただいたり、町内を案内してもらったり。それだけでは説明するには不安で、ガイドはそれぞれ自分なりに勉強をしてサミットに備えたんです。

そして家族の協力は欠かせませんでした。自分でつくった案内内容を家族の前でリハーサルというのでしょうか、バスに乗ったつもりで発表してアドバイスをもらったり……。

私は星野に生まれ育ちましたが、いままでも村の光景をただ「棚田だ」と漠然と見ているだけでした。



浮羽町、葛籠の棚田を訪れる参加者とボランティアガイド。

サミット参加者の声

彼岸花の向こうに

長野県土地改良事業団体連合会
香山 修

「うきはの四季」。私の机の上に一冊の写真集がある。棚田サミットに参加した折に買ったこの本をめくると、四季の色彩に切り取られた棚田が目に見え込んできて、福岡県・浮羽町の葛籠、そして星野村の広内・上原の棚田風景が脳裏に鮮やかに蘇ってくる。

サミット初日の柳生博さん、第二日の中島峰広さん、立松和平さん——と、サミットはそれぞれの内容が収穫であった。だが、それ以上に私が強烈な印象を受けたのは「棚田の里めぐり」で出合った棚田風景。特に間近に

見た葛籠地区の棚田は、わずかに咲き始めた真っ赤な彼岸花と畔の見事な石積みで私を圧倒した。長野県とは趣の異なる見事な棚田。しかし、その裏にある「農家は最盛期の五十軒から十軒に減った」という現実。畔を彩る彼岸花の向こうに垣間見える山里の農家の厳しさが頭から離れないのは、兼業農家に育った私の体験からだろうか。

今回の臨時国会でも首相所信表明演説は「農政」に触れていなかったという事実が、見事な棚田風景とは対照的に私の心を重くしている。

福岡棚田サミットから帰って

徳島県井川町長
中瀧 清文

◆第1回全国棚田サミットで、ふるきやらの皆さんを追っかけ橋原座へ行って以来、棚田に取りつかれた私は、尊敬する新潟県安塚の矢野学町長の、「いやー西の棚田は石垣が壮観」の言葉にホッと、司馬遼太郎先生ばかりに「このまちのかたち」を棚田や段々畑の景観の中に、美しい風格をオーバラップさせてい

ます。◆毎年棚田サミットに出かけ、そこは全国の人に会える場。それがもう一つの楽しみでもあります。安塚の矢野学町長と出会ったのも棚田サミット。今回はだれに会えるか楽しみにしていたら、夕食の席が梶文秋輪島市長と同席。旅館の方にひそかに感謝。期せずして仲良しになって、棚田ネットワークが広がりました。

輪島の千枚田へいらっしやい

輪島市漆器観光課 課長補佐
岡川 芳朗

第6回全国棚田サミットを開催された星野村と浮羽町の皆様にサミットの成功を心よりお慶び申し上げます。そして、表に裏に大会を支えられた全ての皆様に、「お疲れさまでした」とねぎらいと賞賛の拍手を送らせて頂きます。あいにくの天候でしたが、両町村の大歓迎、全国から集まられた方々の棚田に対する熱き思い、そして何よりも宮々と積み上げられた棚田の美しさに、深く感動を覚える両日を送らせて頂きました。

文化を象徴するものであるとの感を感じた。また近年は、世界各国の駐日大使達を千枚田に招き農作業体験を通じて環境保護を訴える、さらには千枚田を舞台に田の神に愛を誓う結婚式を挙行するなど、様々な工夫をこらして千枚田を応援して頂く努力を尽くして頂きました。

今後も、ますます景観維持が困難となりゆく状況にあります。未永く千枚田を守り伝えて、ふるさとの誇りとしてゆきたいと念願しております。皆さん、平成13年秋には、是非輪島の千枚田へお出でになり能登の味覚などを堪能頂きたく、お待ち申し上げております。

雪深い北国へ、南の国へと処変われども、里山と棚田が作る景色は間違いなく日本の原風景、棚田を築き守る心は日本の精神

輪島市は、この景観を保護するべく、昭和45年から耕作補助金制度や基金を設け、またボランティアを募って耕作の支援を続けてきました。奥能登周遊の拠点に位置する立地条件の良さ、優れた景観を活用して、観光との連携を早くから模索してきた

今度の理事会・総会から、2年後の全国棚田サミットの開催地までを採択することとなった。棚田サミット開催のための準備期間を十分にとるためだ。2001年は、観光地ともなっている白米千枚田で有名な石川県輪島市での開催が決定！さらに2002年は、東京にもっとも近い棚田で知られている大山千枚田がある千葉県鴨川市での開催が決まった。さらに、2003年の棚田サミット開催候補地に13日に開かれた首長等会議で岐阜県恵那市が立候補するなど、今後とも棚田の風は全国を力強く吹き抜けそうである。

2001年は石川県輪島市で 2002年は千葉県鴨川市で

今度の理事会・総会から、2年後の全国棚田サミットの開催地までを採択することとなった。棚田サミット開催のための準備期間を十分にとるためだ。2001年は、観光地ともなっている白米千枚田で有名な石川県輪島市での開催が決定！さらに2002年は、東京にもっとも近い棚田で知られている大山千枚田がある千葉県鴨川市での開催が決まった。さらに、2003年の棚田サミット開催候補地に13日に開かれた首長等会議で岐阜県恵那市が立候補するなど、今後とも棚田の風は全国を力強く吹き抜けそうである。

佐賀県相知町

取材・文・石井里津子

40haの棚田すべてに
機械が入る。高いあぜを築き、
広い田を造り得た石積みの技術

歴史が織りなす藤野の棚田

佐賀県相知町藤野の棚田。町の南端にあり、霊山で知られる八幡岳(763.6m)の北側、標高1500〜4200mの間に40ha、1050枚の棚田が広がっている。5つの谷に沿って拓かれた棚田は、地図上では、山頂に向かって指を広げた手のように見える。

山の一角に祀られている五百羅漢に行こうとすると、突然激しい雨に打たれた。「心して来んしゃいよ」と山の守り神がいつているかのようだった。

厳粛で神聖。険峻な斜面に連綿と孤高にそびえる石積みの世界。気づくと40haの棚田の中に1件の家もない。集落は山の麓に密集している。集落は66戸。うち農家は48戸だ。佐賀からの旧道が集落の入り口まで続いているところを見ると、古くから山裾

の方が便が良かったのだろう。

だが、棚田を登り切った山の上に2軒だけ家がある。長者と呼ばれた友田家だ。ここに友田家が1717年(享保2)に建てた「池の観音堂」がある。1789年(寛政元)には仁王像、石門なども建てているが、これらはどこか異国情緒を漂わせ、友田家の繁栄ぶりを忍ばせた。

が、地主というわけではない。一農家の繁栄は、安土桃山末期、唐津城主寺沢志摩守が「新しく開墾した田畑で一毛作のところは永久に税金を納めなくともよい」と掟を設けたことにある。その後、1817年(文化14)小笠原氏が唐津城主になってからはこの地も課税対象地となり、次第に友田家も衰退したという。

相知町には、1691年(元禄4)に描かれた検地用の絵図が残っている。藤野棚田がある平山土地区を見ると、現在集落がある場所に、すでに20軒ほどの家があり、藤野棚田は畑とされ、田の絵柄はない。だが、本当に田んぼはなかったのだろうか。

絵図が描かれる70年ほど前、1618(元和4)年に建てられた町内でもっとも古い刻の墓がある。この友田家の墓である。町文化財保護審議委員の祭城一子さんは「石に文字を刻むにも刻み賃を払いますから、このころから友田家は、かくし田とか、税のかからない田をもって財を成し

ていたんでしょね」と語る。畑では長者になるほどの財は築けないというのだ。

町農林課岩本英樹さんと田中康博さんとともに、歴史を紐解くと話は尽きなかった。

棚田開田の歴史は、明治27年に改修されたため池(旧ため池)、昭和19年に造成された新しいため池(新ため池)に伴った開田までつながってくる。

地元農家、百武力男さん(75)は、新たなめぐりに参加した日のことをこう話す。

「銅どろ、赤土ば掘っては、水の出るまで地面、石でたたいて、桐づきをしたもんだい。20人くらいで大きな石に2〜3メートルの縄つけて、それぞれ引つ張って、桐づき唄唄って。唄かい? 『今日は〜日も〜良〜し、ど〜う〜づ〜きは〜じ〜め』。だいでん(誰でも)唄唄唄ったさ」。

ため池造成に伴って、昔ながらの慣習である「手間講」という互いに労働を交換し合う組によって開田がなされたという。

優れた土木技術に圧倒

藤野の棚田は耕作放棄地が少なく、約3%しかないという。耕作が続く要因に優れた土木技術があげられるだろう。どの田にも機械が入るといふ。近年整備をしたわけではない。人の手による「せまち直し」は行われているが、農道も田んぼの脇を

うまくカーブして通っている。

勾配は平均4分の1。石積みのあぜ高さは3〜8mのものも多く、10mを越すものもある。それを垂直に、また反り返らせて積み上げている。険峻な斜面に高いあぜを築き、広い田をつくり得た技術がここにはある。

さらに、谷の1つ大平谷では、どの田にも暗渠が通っている。巨大なものは、天井に1mぐらいありそうな1枚岩が利用され、通れそうでもある。暗渠や湧水口など石で組まれた横穴は、200以上あるだろうという。

暗渠から出てきた水はすぐ田に入れられるわけではない。用水路をつくり、大きく迂回させて田に入れる。さらにその用水路は他の田へ続いていく。

田越し灌漑は、ほとんどなされていない。用水路から水を入れるのだが、田に水口は1つしかなく、同じ口から溢れ出た分を再び用水路に戻し、次の田に入れる仕組みになっている。温めた水を無駄にしない知恵だ。

湧水口や暗渠では、水が一拳に流れ出ないよう石が置かれ、多すぎる水を横の用水路に逃がす工夫もある。こうした先人の配慮のおかげで、大雨などの被害から守られてきたという。

ため池、谷川、湧水を利用した40haの棚田には、先人の知恵と努力によって築かれた水の道が張り巡らされていた。

一方、農家の想いも熱い。区長の居石政宏さん(60)は

「32年前、田んぼに杉を植えるかどうか親戚会議を開きました。先祖さまの田んぼを個人の勝手に杉林にしては先祖さまにすまんゆうて……」。

中山茂広さん(52)もいう。

「もともと地が弱くて災害を受けやすい田んぼもあるとよ。それでも先祖に悪いゆうて、年70万以上も出して石垣直して田んぼするもんなあ。ここのもんは」。

1997年、集落のむら興しを行う「ふるさと会」が、荒廃田に花を植えた。中心となっている百武弘之さん(53)は

「棚田を荒らしたくなくて。農協に勤める仲間から田植え、稲刈りツアーをやってみようやと、都市との交流をはじめたところです。そしていま、ここの棚田米が出せないか考えています」。

毎年9月23日には、代々、集落で受け継がれている「藤野浮立」が行われる。25人が太鼓をたたき、鉦を鳴らし踊り、五穀豊穡を祈るといふ。

大草秀幸町長は語る。「いま農業をテーマにした観光地として町をつくらうとしています」。農産物、農業土木(農業遺産)、開田の歴史、農村文化、交流、農家……農業をめぐる宝石の原石が、すでに光を放っていた。今後、いかなる磨きがかかるのだろうか。いまから楽しみである。

あなたはどうして棚田は何ですか？

全国各地からひと言をお寄せいただきました。ひと言では言い尽くせないのでありますが、そのひと言に込められた思いを読みといていただけませんか？

■「過去の先人達の偉業を再認識する場であり、これからの国土や環境を守るために無くてはならないもので、地域みんなで考えるべき大きな柱である。」

原田俊平(46歳町職員 宮崎県五ヶ瀬町)

■「棚田とはやっかいなものです。そしてかわいそうな生き物です。」

井上 充(52歳町職員 佐賀県肥前町)

■「藤野の棚田は石積み庭園」

岩本英樹(40代町職員 佐賀県相知町)

■「棚田とは単なる米の生産地ではなく地域の歴史、風土そのものを表す歴史遺産です。」

田中康博(40代町職員 佐賀県相知町)

■「食糧増産の昔人の足跡」

居石政宏(60代藤野区長 佐賀県相知町藤野)

■「先人が築いたりっばな文化遺産だと思ふようになった。皆さんに見ていただきたい。」

百武弘之(50代町会議員 佐賀県相知町藤野)

■「グリーン・ツーリズムを進める上での貴重な地域資源」

滝内宏治(20代町職員 福岡県浮羽町)

■「様々ないのちを育ててきた棚田。そこには田舎ならではの豊かな暮らしがある。」

田。そこには田舎ならではの豊かな暮らしがある。」

三浦秀史(58歳柿木村長 鳥根県柿木村)

■「条件不利地域を逆手に取って、将来に夢と希望に満ちた地域づくりの出来る場所。」

村上郎(42歳大井谷助はなごうの会事務局 鳥根県柿木村)

■「あくまで棚田は生産の場。農業の楽しさ、苦しさ、素晴らしさをすべて持っている。」

前まで棚田はお荷物。今は地球の人々を結ぶ宝物。」

■「大井谷の棚田。またひとつ柿木村が好き

な理由があった。」

棚木昭典(38歳町職員 鳥根県柿木村)

■「地元は大変だろうな。何故守らなければならないのかかわらない。」

寺本恵子(鳥根県石見町)

■「町の活力になる。ありがたい！過疎の町になろうとしていたので。」

山本春子(68歳農業 鳥取県若桜町)

■「学習の場！ 今こそ学習観の転換！」

藤本勇二(38歳小学校教員 徳島県上勝町)

■「何世紀も受け継がれる棚田への熱い想いにほんの一時関わっ

ていたい。」

阿佐久美子(51歳耕作者の応援団 徳島県井川町)

■「跳んだ、はねた、転んだ棚田は僕らの運動場。れんげの香りが残るまち」

近藤清美(41歳会社役員 徳島県井川町)

■「苦勞して集めた石と水 階段を流れし音に心安心 秋には黄金の色映えて 食べるおにぎりまたおいしい」

宮浦美(49歳農業 愛媛県大洲市田処)

■「棚田は、命の息するところ、棚田の未来は、人類の未来。」

河野学(45歳町職員 愛媛県城川町)

■「棚田に感激！ 残して欲しい。昔の人の偉業をつくづく感じる。草を刈ることの大切さなど。」

安川ひろ子(62歳農業 愛媛県松山市)

■「農耕民族の遺伝子にある原風景。心を癒す風景素材。グリーンツーリズムの受け入れと情報発信の拠点。」

戸田善規(47歳加美町長 兵庫県加美町)

■「棚田は心のふるさと。世界に開かれた窓にしたい。」

津川兵衛(58歳神戸大学農学部教授 兵庫県明石市)

■「岩座神地区の人たちと仲良くなる事が出来た『きっかけ』」

「ありがたいもの」だと思っています。」

今中孝介(39歳劇団プロデューサー 兵庫県加美町)

■「耕して天に至る」といわれるように美しく、また、農村の原風景として日本人の心に息づいてきた貴重な文化遺産である。」

木原勝美(70代岩座神棚田保存会会長 兵庫県加美町岩座神)

■「人と人とのつながりを大切にしていかなければ存在しない地域。」

小野博史(43歳町職員 兵庫県加美町)

■「棚田が抱えているジレンマは、世界が抱えているジレンマ。そこから多くを学びたい。」

篠原博(27歳学生 兵庫県加美町岩座神)

■「水をどうやって引くのか。川から取っているのかなど考えさせられるところ。」

脇谷貴成(22歳大学生 兵庫県神戸市)

■「子供の頃、しんどい農作業をした思い出を今、心のやすらぎに変えてくれる。」

櫻井好(49歳町職員 京都府大江町毛原)

■「条件の悪い山間部で先人達が汗と涙で築いてきた貴重な財産。」

神社孝徳(40歳大江町職員 京都府福知山市)

■「自然を受け継ぎ守り続けることは大事。先人の知恵は素晴らしい！水利とか。」

桂田秀次(会社員 大阪府大阪市)

■「耕作者の苦勞も考えず、見た目、美しさに感動し、安らぎを感じ、心洗われるところ。」

恵木博若(町職員 三重県紀和町)

■「いろんな遊び、楽しみがあるところ。労働の厳しさは計り知れないが、終わってからのこちよい汗、すがすがしさがそれ以上にすばらしいところ。家族労働の思い出。」

加藤勝巳(市職員 岐阜県恵那市)

■「心のふるさと。自分の原風景だ。棚田の中で解放されている子どもたちを見て、棚田は学びの場と思う。」

荻野嘉美(小学校教員 愛知県岡崎市)

■「田舎のない者にとって棚田は日本の原風景であり、アジアの原風景である。出会いは遅いが棚田はふるさと。」

男性(37歳 長野県辰野町出身)

■「棚田棚田といってくれるな！
荒れた棚田も話題にしたらしい。」
金子万平(長野県)

■「一番大切なもの。恋人。何よりも棚田が大好きです。かわいがる私」
犬塚雅俊(個人会員 静岡県浜松市)

■「心のふるさと」
向笠功一(46歳技師 神奈川県川崎市)

■「遠くにありて思うもの。街で
噪音やネオンに負けそうになる
ときに、思い出す光景。」
男性(30代TVディレクター 東京都品川区)

■「残したい」
小宮健(38歳会社員 東京都新宿区)

■「小さい頃から田んぼを見て育っ
たので、突然、棚田と言われて
も…。同じ田んぼだと思っ。」
坂本 愛(30代ライター 東京都杉並区)

■「写真を毎日撮りたいと思っ
てい。」
駒沢正(76歳 東京都杉並区)

■「生きるということ、そして人
がどうやって生きてきたか、そ
してどうやって生きていくかを
教えてくれる場。」
石井里津子(30代ライター 東京都中野区)

■「新しい価値の発見」
荒木恵美(30代 東京都小金井市)

■「原風景に近い。ホッとする。
自分は小さい頃海を見て育った。」
小柳(出版社勤務 東京都)

■「棚田は可愛い。」
高橋純子(18歳 法政大学1年 東京都)

■「日本の古い童謡の世界のよう。」
高松ゆり(18歳 法政大学1年 東京都)

■「棚田パノラマ体験展に行っ
て田植えをしたと思ったところ。」
羽原梢(19歳 法政大学2年 東京都)

■「棚田はのどかな感じがする。」
島田卓也(27歳 大学職員 東京都)

■「文化ではないでしょうか！
地方にとって有効な手段。稲作
の歴史の詰まった文化財であり
技術の宝庫。」
岡村洋平(22歳大学生 千葉県市原市)

■「子どもたちが稲づくりに関わ
らねば、また教師自身がつくら
ねばいけない。地元と教師が協
力しあい後継者を育成しなければ
いけないと思わされる。」
室屋由美子(千葉県野田市)

■「食料生産実践をやる場。実際
にやる中で知ったり考えたりし
ていきたい。」
伊佐政史
(47歳スポーツインストラクター 千葉県習志野市)

■「田植えをやってみようと思っ
たところ。」
女性(中学校教師 千葉県松戸市)

■「地域が活性化する原動力。」
石田三示(48歳酪農 千葉県鴨川市)

■「素晴らしい景色！でも維持
していくのは容易じゃないね。」
佐久間芳夫(65歳農業 千葉県鴨川市)

■「地元の人間だけど心が安らぐ。
だから都会の人にとってはなお
さら。」
川名まさ子
(54歳みんなの里事務局 千葉県鴨川市)

■「友だちの輪が広がった。いろ
んな人と出会った。残したい気
持ち以上に友だちの輪。」
首藤悦子(48歳会社員 千葉県鴨川市)

■「遊びの場。」
二川(会社員 千葉県鴨川市)

■「生活の場。生活の糧。昔から
受け継いできたもの。我々の年
代は捨てられない。守らねばな
らない。」
男性(59歳農業 千葉県鴨川市)

■「崩したくない。」
福井忍(63歳農業 千葉県鴨川市)

■「水対策がたいへんなところ」
内木加(58歳農業 千葉県鴨川市)

■「ふれあいが楽しい。」
松本幹子(47歳会社員 千葉県鴨川市)

■「農業農村の歴史が凝縮された
空間。」
表良広(40代市職員 富山県氷見市)

■「日常生活の中で一番身近な自
然風景、しかし、景観保全を思
うと……。」
屋敷宗(40代市職員 富山県氷見市)

■「自分にとって『早天の慈雨』。
「素直な心が共鳴するところ。」「健
康な『良心』をとりもどせる唯
一の場所。」「立ち止まると涼風が
吹き、歩き出すととにかく疲れ
る場所。」
宮田隆(40代氷見市職員 富山県射水郡)

■「日頃の忙しい時間を忘れゆっ
くり充実した時間を感じられる
場所。」「先人の苦勞に感謝。そ
して、おいしいお米に感謝。」「悠
久の時を経て育まれて来た偉大
なる先人のあしあと。」
万葉の詩人(20代市職員 富山県氷見市)

■「もう一つのふるさと。」
竹岸清子(50代市職員 富山県氷見市)

■「耕して天に至る先人の農への
思い入れやこの景観を後世に伝
えたい。」
吉崎新(50代市職員 富山県氷見市)

■「今が大切。守ろう。日本の棚田」
広げよう皆の力で！ 食べよう
お米！」
磯邊美智子(50代市職員 富山県氷見市)

■「いつか、何処かで見たような
懐かしさを感じさせてくれる
場所」
夜桜銀次(30代市職員 富山県氷見市)

■「棚田とは、やすらぎのふるさ
とです。子供のころから自然の
なかに育った私にとって、棚田
はいつまでも思い出に残り、心
にやすらぎを与えてくれる奥の
深い原風景だからです。」
俣野良夫(50代町職員 新潟県安塚町)

■「棚田は米をつくるところ。そ
して心を耕すところ。かつてど
うして俺がこんなところを耕さ
なきゃならんと思っていた。い
まは俺がやらなきゃ誰がやるんだ
と思っ。」
丸山新(50代安塚町助役 新潟県安塚町)

■「安全な米をつくること。さ
らに水瓶になったり、地すべり
を防いだり環境をつくり守るこ
ところ。必要なもの。」
池田 勲
(60代農業・町会議員 新潟県安塚町)

■「大変だなあ。眺めはイイ」
森谷エキ子(60歳農業 山形県寒河江市)

■「日本人のふるさとを守るため
人が大事。」
門脇

■「生活の美学。キレイと感じる
か感じないかだ。ある日棚田が
キレイだと思った。」
長村雅文(43歳 脚本家)

ご協力いただきましたみなさま、本当にありがとうございました。中にはインタビューにお答えいただき、こちらでまとめさせていただいたものもあります。ご了承ください。どうぞご感想やさらなるひと言などお寄せください。お待ちしております。

Topics 1

岐阜県恵那市坂折で稲刈りツアー実施!

さる10月1日(日)、岐阜県恵那市の石積み棚田が広がる坂折地区で、保全・利活用に向けての第一歩として、稲刈り体験ツアーがはじめて実施された。

県内から子ども26人を含む71人が参加し、午前中に稲刈り、はざ掛けを体験したほか、午後には地元恵那先史研究会の方々をガイドにじっくり棚田を散策し、田の中にあるペトログラフィ(古代文字)が刻まれた石なども見学した。



Topics 3

熊本市で棚田シンポジウム開催 「棚田トーク21」

10月25日(水)に熊本県熊本市で「棚田トーク21」(熊本県主催)が開催され、約5000人が集まった。熊本県民テレビキャスター本橋馨氏のトークや県内矢部町菅地域、坂本村日光地域の棚田保全の取り組み報告のほか、マーケティングプロデューサー平岡豊氏による「農業マーケティングとしての棚田」、そして「棚田

の保全:そして、ゆくえ」をテーマにパネルディスカッションが行われた。主催者である県農村整備課山中智宏さんは「県民の方々に広く棚田地域の現状や苦勞、取り組み、保全の必要性を知っていただくための、糸口企画」でした。今後は経済活動へ展開していければと思っています。と語っている。

矢部町菅地域の報告から。



Topics 2

浮羽町で「エンジョイスクール」開講!!

「棚田での稲刈り体験」「滝めぐりとヤマメ串焼き体験」「クラフト(どんぐりでトトロ作り)体験」「ロープワーク体験」「フルーツ狩り体験」「つづら棚田見学」。これらは9月20日、21日に福岡県浮羽町で行われた福岡県宗像市立自由が丘中学校1年生238名(6クラス)の自然体験教室「エンジョイスクール」での体験メニューです。

これは、自然とのふれあう機会が少ない青少年の健全育成を目的として計画された学校行事で、1クラスずつ6つの体験を2日間入れ替わり行いました。「棚田で稲刈りをさせてもらえませんか」と中学校側から問い合わせがあったのが4月ごろ。最初は238名という数の多さに不安を抱えながらも町外の中

学生に浮羽町の魅力を知ってもらう機会、またグリーン・ツーリズムの推進上必須となる「体験メニュー」の新規開拓に取り組む機会と捉え、受入施設などの紹介・調整等を行いました。棚田関連でいえば、稲刈りと散策しながらの棚田見学を行ったわけですが、はじめて棚田を訪れる生徒ばかりで、驚いてばかりいたようです。

地元の2つのテレビ局でも稲刈りを紹介してもらい、都市住民を受け入れようとする浮羽町の姿勢をPRすることもできました。青少年の健全育成に農村の自然、文化が今後ますます生かされていくことを願っており、交流による地域活性化にも結びつけていきたいと考えています。(浮羽町企画振興課 滝内宏道)

お便り テラス

「棚田はエライ」(農文協刊)を十冊購入しました。前号特集「棚田のもつ教育力」に感謝しています。もの中心から人間中心の考えに立って活動を生み出し、人間関係を再生産していくとする運動があります。学校が地域学習を巧みに編成し、この運動と一体となった実践を繰り返しています。ものやことの節々を思い描く情感豊かな子どもは、こうしてこの中に置か

全国組織 棚田の保全・中山間地域活性化のための

会員募集中

全国棚田(千枚田)連絡協議会
お申し込み・お問い合わせは協議会事務局
三重県紀和町 企画観光課
〒519-5413 三重県南牟婁郡紀和町板屋78
TEL 05979-7-1111 FAX 05979-7-1003

新しく会員になったみなさま

- 正会員<自治体> 島根県土地改良事業団体連合会
- 正会員<個人> 新潟県高柳町/中村由信
- <個人> 東京都杉並区/田村匡世
- 個人賛助会員 神奈川県横浜市/角田 実

編集後記

「棚田とは何か」という問いは、ちょっとシンドイかなあと思いつながらの企画でしたが、みなさんの温かくずしりと重い言葉に感動、でした。本当にありがとうございました。先日、別件で柳生博さんにインタビューをさせていただいたのですが、以前ライステラスでもお世話になっていましたし、棚田についても話は盛り上がりました。柳生さんは棚田を「日本の宝だ、文化財だ」とおっしゃっていました。棚田とは何であるか―棚田の価値をきちんと確立させていくことも今後大切なことのように思います。今回でライステラスも20号。無事みなさまのおかげで発行することができました。これからも情報、ご意見、寄稿などお待ちしております。石井里津子

れて育つのだということがはつきりしてきました。(千葉県鴨川市大山小学校 校長 押元文博)